

巻 頭 言

このところ、数学会の雑誌に関する動きが激しくなっています。Journal of the Mathematical Society of Japan (JMSJ)は電子化に向けて急速に動いていますし、Japanese Journal of Mathematics (JJM)は、新しい体勢で再出発しようとしています。

言うまでもなく、論文雑誌は数学の研究成果の流通、発表の主要な手段として、数学研究における重要な役割を担ってきました。周知のように、その論文雑誌のあり方は、近年大きく変わろうとしています。インターネットの普及によって電子化を目指す雑誌が多い一方、商業雑誌の価格高騰が大学財政を圧迫しているとの指摘も多く聞かれます。シュテュットガルト工科大学のように、エルゼヴィアの雑誌の購読をすべて取り止める、という思い切った行動に出ている大学もあるようです。

振り返って考えてみると、論文雑誌は基本的にふたつの機能を果たしてきたと思われまふ。ひとつは、レフェリー・システムを通じての論文の選別、もう一つは論文の流通です。(業績の保存、という機能も考えられますが、これは基本的に出版社の仕事ではなくて、図書館の仕事と考えるべきだろうと思います。)ところが、現在は上記の論文雑誌のふたつめの役割(論文の流通)は、極めて小さくなっているように思います。ほとんどの論文は、プレプリント・アーカイブや個人のホームページから入手可能となり、情報も速く、便利で、しかも多くの場合無料です。少なくとも、もはや学術情報の流通を出版社(あるいは学会、大学等の出版部)が独占している、という時代ではなくなっています。

一方、もうひとつの役割である論文の選別は、業績評価の重視と相まって、ますますその重要性を増してきている様です。しかし、レフェリー・システムは、編集委員会を中心とした、数学者たちのボランティア的な貢献に依って成り立っています。必ずしも、商業出版社に頼らなければならない仕事ではありません。

そう考えると、「数学に商業出版が本当に必要なのか？」という問が浮かんできます。もちろん、雑誌の編集・出版には広告、取り次ぎをはじめとして多くの事柄が関わります。編集に関わる事務のコストも、決して小さいものではありません。単に、数学者の協力とネットワークによって商業出版に代わる電子雑誌を作ればよい、というほど単純ではないだろうと思います。

しかし、逆に言って、商業出版社の提供する、高付加価値、高コストのサービスのコストを数学の世界は負担できるのか、という疑問もあります。ある日突然、利益が上がらないために商業的な(数学の)学術雑誌が消えて無くなる、という可能性は、そう小さくないように思います。実際、紀ノ国屋書店は数学の学術雑誌の出版からは撤退するようですし、他の出版社も同様の行動にできる可能性は否定できません。その場合に備えて、数学者は何ができるのかどのような準備が可能か、考えておくべきかもしれません。日本数学会の果たすべき役割は、少なくともないようにも思います。

(中村 周 東京大学大学院数理科学研究科、前数学編集長)